

新年のご挨拶

新春のお慶びを申し上げます。本年もよろしくお願いいたします。

COVID19 の世界的パンデミックを引き起こした 2020 年もおわり、新たな一年を迎えます。ワクチンの開発のニュースには期待したいところですが、コロナウイルスとともに生きる時代はまだ続きそうですね。

まず今年の活動報告です。

- 1) 令和 2 年 4 月に、ロータブレーター施設基準が改定になりました。
- 2) 令和 2 年 12 月に、P2Y12 阻害薬のステント後単剤使用が認められるように改訂されました。
- 3) CVIT-TV 事業を開始しました。コロナ時代に対応した最先端の WEB での情報共有の会と思います。
- 4) カテ室におけるコロナ対応の声明を 3 回にわたり発表しました。
- 5) 新会員システムが稼働始めました。

今年の抱負

従来 CVIT の弱点であった、保険改定の分野で、ロータ施設基準と P2Y12 阻害薬単剤使用を 2020 年に実現しました。「CVIT を一流の学会にする」という目標を理事長就任時のマニフェストに掲げましたが、その一步を歩み始められたと思います。「会員の力を合わせて対応すれば行政を変えることができる」という点は我々 CVIT 会員全員が自信を持ってよいことであると思います。

CVIT 発展の戦略として、レジストリー事業の充実があります。アメリカの ACC という学会は、臨床系の学会として素晴らしい進歩を遂げましたが、彼らの発展の第一歩はレジストリーでした。CVIT も J-PCI という日本を代表するレジストリーを持っています。日循の理事会でも一目置かれるような存在になり、レジストリーから論文がいくつも投稿されるようになるまでに成長しています。皆様にとっては大変なご負担をかけているものの、充実した事業に発展するよう、2 月の CVIT 総会での ACC との合同シンポジウムも参考にしていきたいと思います。

ジャーナルは、レジストリーとともに学術面の両輪です。CVIT 誌は JSIC と JACCT が合併した時にジャーナルの合併も行い、2011 年より英文誌が創刊しました。実は雑誌の名前を編集委員会で CVIT と決め、その後学会名を CVIT にしたという経緯があります。創刊時に編集長が CIT でどうかと提案したのを、当時編集副委員長であった私は中国の会と同じだから CVIT にしようとして提案しました。今年が創刊 10 年になりますが、昨年末ついに仮想インパクトファクターが 2 点を超えて、今年インパクトファクターを正式に申請する年になります。インパクトファクター取得は学会とし

ても一つの夢であり、是非実現したいと思います。

コロナ感染症により、行政の対応が遅れていますが、今年は「循環器疾患対策基本法」の具体的な施策の実行の年となります。中央から各県に作業が降りてきて、各県での対策が進み始めているところと思います。Primary PCIの体制を日本で維持するという点に関しては注意を払っていかないといけません。さらに2024年に医師の働き方改革が施行され、その両立が重要です。働き方改革と虚血性心疾患を担っている学会として、各県、各支部においても行政との対応をよろしくお願いしたいと思います。

今年の抱負を述べさせていただきました。CVIT すべての会員の健康とカテーテル治療の成功をお祈りしております。

令和3年元旦

一般社団法人

日本心血管インターベンション治療学会

理事長 伊 莉 裕 二